

『グリム童話集』注釈の試み (4) (KHM 6~8)

Untersuchungen der Anmerkungen der Kinder-und
Hausmärchen der Brüder Grimm (4) Nr. 6~8.

小高康正*

Yasumasa Kotaka

KHM 6

Der treue Johannes

「忠実なヨハネス」

1 AT 516

アールネ／トムソンの分類では、「魔法昔話」のなかの「超自然的難題」、516番でグリムの話と同名のタイトル (Faithful John) である。

このタイプの話の構造は次のようになっている。

- I. 王子が恋に落ちる。王子は王女の(a)絵(像)あるいは(b)夢を見て、遠くの王女を慕う。
- II. 王女を連れ去る。忠実な家来、兄弟または義理の兄弟の援助を得て、
 - (a) 誘い出して商船にのせる。
 - (b) 女性に変装して王女のもとに忍び込む。
 - (c) 地下道を通るか、別のやり方で。
 - (d) 家来が王子の助言者として。
- III. 帰途の危険
 - (a) 王子と花嫁は3つの危険に遭う。
 - (1) 毒の入った食べもの
 - (2) 毒の衣服
 - (3) 強盗または溺れている人と会うなど。
 - (b) これらの危険は、(1)花嫁の父親か、(2)王子の父親、または(3)王子の継母によってもたらされる。
- IV. 誤解された家来
 - (a) 鳥あるいは幽霊の会話を聞いて、
 - (b) 忠実な家来は危険を知り、それらを防ぐ努力をする。
 - (c) 家来が眠っている王子の花嫁に触れたため

に疑われ、自らの正当性を示さなければならぬ。

(d) 事情を話すとすぐ家来は石にかわる。

V. 家来の魔法が解かれる。

(a) 家来は王子の子どもの血によって生き返ることができる。

(b) あるいは王子が遠くから取ってきた薬によって。

(c) 王子は自らの子を殺し、家来の命を救う。子どもは生き返る。

グリムの話では、父親の王が死ぬ間際に王子のことを託したヨハネスという家来が主人公である。王子は見てはならないと言われた部屋の「黄金の屋根の国に住む王女」の絵を見て恋する。ヨハネスは王子を助けて「商人」に変装し、姫をさらって船に乗せる。王子の国へ帰る船上でヨハネスはカラスが三つの危険について話をしているのを聞く。王子が乗るとどこかへ連れ去ろうとする馬。王子を焼き殺そうとする花婿の衣装。婚礼の宴会で花嫁が踊ると倒れて死んでしまうこと。しかしこれらの危険を人に話すとその者は石になってしまう。ヨハネスは誤解を受けつつ、身を賭して三つの危険から王子を救うが、最後には石になる。王女は双子の子どもを生む。その子どもたちの首をはね、血を石の像に塗ることによってヨハネスは再び生き返る。最後には二人の子どもも生き返る。

この話の中心にあるのは、忠実な家来が主人の身を守り、その結果主人の誤解を受けるという点にあり、広くポルトガルからインドの各地まで見

* 教授

いだされる。

日本の昔話で全体的に一致するものは見つからないが、いくつかのモチーフに対応関係が見られる。例えば、王子が黄金の国の王女の絵姿を見て恋し、商人に扮して近づくとところは「絵姿女房一物売り型」と似ているし、カラスから予言を聞くところは、小鳥の話などを聞くことができる頭巾を手に入れたりする「聴耳」とつながる。

2 グリム兄弟の注釈では「ツヴェールンより」と書かれているので、この話もドロテア・フィーマンによるものと見られる。

そのほかに、「もうひとつの話」として〈パーダボルン地方〉のものが紹介されているが、これはベーケンドルフのハクストハウゼン家の提供による。

この話も筋は基本的には変わりはないが、登場人物は王子と家来（忠実なヨハネス）という主従関係ではなく、王が養子にした農夫の息子（ローラン）と王の息子（ヨーゼフ）という義理の兄弟もしくは友人関係で結ばれた二人である。また、父の王の援助があったり、最後にローランを助けるために殺されたヨーゼフの子どもが「命の水」によって生き返るなど、随所で違いが見られる。全体的なまとまりがなく、「忠実なヨハネス」と比べると、完成されていないという印象を残す。

また、「第三の話」としてヴォルフの「メルヒェン集」にも類話があることを指摘しているが、内容への言及はなく、ただページ数を示しているだけである。ボルテ／ポリーフカによれば、これはヘッセンの「忠実なパウル」(Der getreue Paul) という話である。

「忠実なヨハネス」の話が中世ヨーロッパで広まった騎士物語「アミスとアミロウム」（あるいはアミとアミル）(Amicus und Amelius) の話とつながりがあることをグリムたちは気づいていた。「これは明らかにアミスとアミロウムという友情で結ばれた二人の伝説である。一方は他方のために自ら犠牲となり、偽りの不正を行なうが、その者は彼を再び救うために自分の子どもを捧げる。しかし、奇跡が起きて子どもは生き返る。」

その後、この「アミスとアミロウム」との関係性を詳しく考察したレッシュ (Erich Rösch) は、

このタイプの話はもともとはインドで発生し、そこに「アミスとアミロウム」のモチーフが加わってできたもので、それはハンガリーで形成されたという考えを述べている。

ベンファイとライエンもこの話のインド起源説には賛成し、ボルテ／ポリーフカも否定してはいないが、その点よりもヨーロッパに来てから、この話のなかに子どもの犠牲というモチーフが加わることによって、従者の一方的な忠実さを強調する話からお互いの友情や献身の話に深化あるいは拡大されたことを重視している。

バジールの『ペンタメローネ』の第四夜の九番目の「カラス」の話との類似性もグリム兄弟は指摘している。周知のようにこの話も、細部は異なっているが同じタイプに属する。

「イェンナリエッコは、フラットンブローザの王である兄ミルッチオのために長い旅に出て、兄の望みのもの（花嫁）を持ち帰る。しかし、兄をさし迫った死の危機から救うため、自らが死刑の判決を受ける。自分の無実を証明するが、その代わりに大理石の像に変えられてしまう。不思議な出来事が続いたあと、ついに彼は生き返り、幸せに満ち足りて暮らす」という話である¹⁾。

この「カラス」の話では、花嫁の王は魔法が使え、娘をさらわれた仕返しに、三つの危険を仕組む。また、石になった忠臣や殺された子どもを生き返らせるのもこの父親である。このように花嫁の父親が大きな役割を占めているが、グリムの話では父親はまったく登場しない。グリムらもその点に関連して、自分たちの話では魔法使いが何らかの理由から若い王を滅ぼそうとしたことは抜け落ちていと述べている。

グリムの注釈ではほかに、ドイツの古い文学との関係が示されているが、レッシュも海路の商人のモチーフ（語り方）はドイツ的な起源をもち、『グードルーン (Gudrun)』の伝説（叙事詩）²⁾ か中世の吟遊詩人の文学からの借用であると言っている。

3 初版では「ナイチンゲールと足なしトカゲ」が第6番目に置かれていたが、これはヤーコプ・グリムがフランス語の本から翻訳したものであったので、他のフランス語によるいくつかの話

と同様に削除された⁹⁾。そして1819年の第二版からは「忠実なヨハネス」がずっとこの位置を占めている。

参照文献) AaTh, p. 183f. Grimms Anm. S. 16-19. BPI. S. 42-57. Rölleke, Nachweise, S. 445, Scherf, Märchenlexikon, S. 1220-1226. Tompson, p. 111~115, 『民間説話』、下174ページ、関敬吾「大成」第2巻266—275ページ、第3巻288—304ページ)

KHM 7

Der gute Handel

「うまい商売」

1 AT 1642

アールネ／トムソンの分類では、笑話の1642番「歩のよい取り引き」(The Good Bargain)。

I. まぬけな男が蛙にお金を数えるようにと投げつける。

II. 犬に肉を売る。あるいは、道しるべにバターを売る。

III. 彼は自分の損害を王に訴え、姫を笑わせる。彼女を妻として提供される。

IV. むち打ちの割り当て。彼が結婚したくないと言うと、王は彼に後で報酬を与えるという。

V. 借りた上着。ユダヤ人の訴えで、王の前に呼び出され、ユダヤ人から借りた上着を自分のものだ主張し、ユダヤ人の信用をなくさせる。

日本の昔話で一致するものはない。蛙にお金を投げたり、犬に肉を売るといった愚かな行為のモチーフは「愚か婿(息子)」と通じるところがある。また笑わぬ姫を笑わせ、ほうびに結婚するというのは「難題婿」に見られる。

2 グリムの注釈では「パーダーボルン地方から」とメモされており、ハクストハウゼン家(Familie von Haxthausen)から提供されたものである。このハクストハウゼン家は、当時グリム兄弟が住んでいたヘッセンの隣国ヴェストファーレンの古い貴族の家系で、カッセルの北のベーケンドルフに住んでいた。グリム兄弟の注釈に「パーダーボルン地方」や「ベーケンドルフ」と書か

れているのはこの一家からの提供によるものであることを H. レレケは明らかにしている。この一家からはたくさん話(他の話と混成されたり、採用されなかったりしたものも含めると六十話以上)が提供されているが、なかでも末娘のアンナ(Anna, 1800-1877)に負うところが大きいと見られている。この「うまい商売」もそのひとつで、この話は低地ドイツ語から標準ドイツ語に直されて提供されたようである。他にすでに取り上げた第一番「蛙の王様」、第四番「怖がることを習いに旅に出た男の話」、第六番「忠実なヨハネス」などの類話もそうであるが、これらは注釈のなかに入れられた。

グリム兄弟は、農夫が自分に与えられるはずのムチ打ちを番兵やユダヤ人に分けてやるという笑話は、道化、宮廷道化師(Hofnarren)についての古い文献に見られることを指摘している。また十四世紀イタリアのサッケッティ(F. Sacchetti)の「フランス王のいなくなった鷹を連れてくる」農夫についてのノヴェレ(物語)¹⁰⁾でも同じような箇所があることが言われている。

3 この話も初版にはなく、第二版(1819年)より第7番目に、「盗まれたお金」(KHM 154, Von dem gestohlenen Heller)に代わって採用された。

参照文献) AaTh, p. 467f. Grimms Anm. S. 19. BPI, S. 59-67. Rölleke, Nachweise, S. 445. 関敬吾「大成」第8巻92—99ページ。

KHM 8

Der wunderliche Spielman

「ふしぎなバイオリン弾き」

1 AT 151, 1159

アールネ／トムソンの分類では、AT 151「熊にバイオリンを教える話」のタイプに属す動物昔話である。AT 1159「バイオリンを習う鬼」とも共通するところがある。

このタイプの話は、男が熊をだまして、木のくぼみに手(爪)をはさませる。同じように他の動物もだまされ、その後、自由になった動物たちが仕返しをしようとするというものである。

グリムの話の主人公は音楽師で、彼の演奏するバイオリンの音を聞き、狼、狐、兎がそれぞれやってきて、バイオリンを習いたいと申し出る。音楽師は彼らをだまし、木に手をはさみ込ませたりしてひどい目にあわせる。

最後に木こりが聞きにやってきて、音楽師は満足する。

日本昔話では対応するものは見つからない。音楽（楽器の音）を聞いて動物が現われるところは、宮沢賢治の創作童話『セロ弾きのゴーシュ』と似ている。もちろん古いところでは、ギリシャ神話のオルフォイスを思い起こさせる。

2 グリムの注釈によれば、ヴォルムスの近くのロルツェという所から送られてきたが、それ以上のことはわかっていない。

グリム兄弟自身、この話は完全なものではないと考え、「なぜ音楽師がオルフォイスのように動物を魅せ、呼び寄せることができるのに、意地悪ないはずらをするのか、その理由が挙げられていない」と指摘している。

動物の手を木にはさんで動けなくするモチーフは KHM 4「怖がることを習いに旅に出かけた男の話」や KHM 114「賢い仕立屋」にも見られる。前者の話の主人公と音楽師とは怖さ知らずや、無慈悲な性格の点で似ている。

ボルテ／ポリーフカによればフランスの話では、主人公が音楽師ではなく、退役軍人や行商人、はさみの磨ぎ師などの話もある。

3 この話は 1819 年（第二版）より、「ナイフを持つ手」(Die Hand mit dem Messer, Anh. Nr. 2) にかわって第八番に採用された。「ナイフを持つ手」はスコットランドの伝説から翻訳されたものであったため削除されたと考えられる。

参照文献) AaTh, p. 54, 365. Grimms Anm. S. 19. BPI, S. 68f. Rölleke, Nachweise, S. 445.

今回取り上げた三つの話はすべて初版からあったものではなく、再版の段階で取り上げられたものばかりである。最後に、初版から再版にいたる経緯を追って、なぜ再版でこのような入れ替えがあったのか、その背景を簡単に見ておきたい。

1812年の冬に、グリム兄弟はそれまで集めた八十二編の話をまとめて、『子どもと家庭のメルヘン集』第一巻（初版）として出版した。さらに第二巻（初版）の計画もすでに第一巻の印刷の時にはあった。つまり、この時期までに第一巻に入れられなかった話がすでにたくさんあり、出版社もついでに出すことを合意していたからである。

そして1812年以降も継続して集められた話を含め、三年後の1815年に第二巻は出版された。全七十編のうち四十八編がハクストハウゼン家とフィーメンニン（フィーマン夫人）からの提供によるものだった。この第二巻に取り上げられた話はその後の改訂に際してもほとんど手直しがされていない。その理由は「技術的になれてきたからだけではなく、才能ある語り手にめぐまれた」(H. レレケ) からではないかと考えられる。というのは、グリム兄弟はこれまで話の提供者についてはほとんど触れていなかったが、この第二巻の序文で初めて語り手について述べている。それはフィーマン夫人のことである。「カッセルの近くにあるツヴェーレン村の農家の奥さんと知り合ったことはすばらしい偶然のひとつであった。わたしたちはこの婦人からここで取り上げた、ほんとうのヘッセンの話のかなりの部分と第一巻の補完のための話をいくつか手に入れた。まだかくしゃくとして、五十歳を大きくは越えていない。この婦人はフィーメンニンといい、しっかりした、感じのいい顔をしていた。目は明るく鋭いまなざしをし、おそらく若いころは美しかったにちがいない。彼女はこれらの古い話をしっかり記憶しており、[……] 慎重に、確実に、並みはずれて生き生きと語った。自分でもそれを楽しみながら、初めは全く自由に、それから望まれば、もう一度ゆっくりと話してくれるので、少し練習をすれば、筆記することができる。いくつかの話はこのようにして一語一語書き留められた。その真実性を見誤ることはないであろう。」(KHM 1815, S. IV)

このようにグリム兄弟から理想的な語り手のように紹介されたフィーマン夫人であったが、厳密にはこの女性は昔からのヘッセン土着の農家の夫人ではなく、フランスのユグノー（新教徒）の家系の出身であったことを H. レレケは明らかにし

ている⁵⁾。

1815年に第二巻を出した後、計画ではさらに、1815年終わりまでに集められた分を第三巻として出版する予定であったが、第二巻の売れ行きがよくなかったので中止となった。

初版では第一巻(1812年)、第二巻(1815年)ともに話の本文の後に、グリム兄弟による各話の注釈が付けられていた。つまり、彼らはメルヒェン集の学問的性格を重視していたのである。しかし第二版(1819年)では全体の構成が大きく変えられた。そしてこの版以降、1857年の第七(最終)版までの改訂の基本路線が敷かれることになる。

第二版の特徴を挙げてみると、まず、第一巻と第二巻とが一つに合わされて、通し番号が付けられた。そして、各巻の注釈部分を省き、本文だけの読みやすさを優先させた。注釈部分は後に第三巻として独立して出版された(1822年)。また、本文の方も170編のメルヒェンを中心としたものに加え、「子どもの聖者伝説」(Kinder-Legenden) 9編が新たに設けられた。

ところが第二版での変更の大きな特徴はこのような構成面にあるだけでなく、本文の編集にもかわっていた。初版の編集にあたっては兄ヤーコプと弟ヴィルヘルムの共同作業で行なわれていたが、第二版より話の選択(入れ替えや新たな採用)と本文の手直しがもっぱらヴィルヘルムに任されるようになった。この時それまでの学問的性格を重視する立場から、子どものための「教育の書」という考え方に重心が移っていった。そしてこの方向で後に「グリム・ジャンル」(Gattung Grimm)と呼ばれるような独自のメルヒェンの文体を生み出すことになるのである⁶⁾。

I 参考テキスト：『グリム童話集』の各版(邦訳がある場合は掲げておいた)

1 手稿(1810年、いわゆるエーレンベルク稿)
Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm. Synopse der Handschriftlichen Urfassung von 1810 und der Erstdrucke von 1812. Hrsg. von Heinz Rölleke. Cologny-Geneve 1975.) (以下、Rölleke, Älteste Slg. と略す。) (小沢俊夫訳「メルヒェン集—エーレンベルク稿」、

ドイツ・ロマン派全集第十五巻『グリム兄弟』、国書刊行会、1989年、9—115ページ所収)

2 初版(第一巻：1812年、第二巻：1815年)
Kinder- und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Vergrößerter Nachdruck der zweibändigen Erstausgabe von 1812 und 1815, hrsg. von Heinz Rölleke, Göttingen 1986.

3 第二版(1819年)
Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen. Nach der zweiten vermehrten und verbesserten Auflage von 1819,* hrsg. von Heinz Rölleke. 2 Bde. Köln 1982. (小澤俊夫訳『完訳 グリム童話』ぎょうせい、昭和60年)

4 第三版(1837年)
Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen. Vollständige Ausgabe auf der Grundlage der dritten Auflage(1837),* hrsg. von Heinz Rölleke. Frankfurt/M. 1985.

5 第七(最終)版(1857年)
Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen: Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm,* hrsg. von Heinz Rölleke. 3 Bde. Stuttgart (Philipp Reclam) 1980. (金田鬼一訳『グリム童話集』岩波文庫、関敬吾/川端豊彦訳『グリム昔話集』角川文庫、高橋健二訳『グリム童話全集』小学館ほか。)

グリム兄弟による注釈は上記使用テキストのなかに含まれている。断りのないかぎり、第七版の第3巻目に収録された「グリム兄弟の注釈(1856年)」(Originalanmerkungen der Brüder Grimm, 以下 Grimms Anm. と略す)を参照。

II 主な参考文献

Anti Aarne/Stith Thompson: *The Types of the Folk-Tale.* Helsinki³ 1961. (FFC 184.) (以下、AaTh と略す。話型分類の記号はATとし、その番号を示す。)

Bolte, Johannes/Poliyva, Georg: *Anmerkung en zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm.* Bd. I—V Leipzig 1913—32. Neudr. Hildesheim 1963.) (以下、BP と略す)

H. レレケによる注釈および解説は以下のとお

りである。

- (1) “Nachweise”, in: *Brüder Grimm KHM*. Bd. 3, hrsg. von Heinz Rölleke. Stuttgart 1980, S. 441-543. (Rölleke, Nachweise と略す。以下同様。)
- (2) “Einzelkommentar”, in: *Brüder Grimm KHM. Vollständige Ausgabe auf Grundlage der dritten Auflage* (1837), hrsg. von Heinz Rölleke. Frankfurt/M. 1985, S. 1190-1285.
- (3) “Erläuterungen”, in: *Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm, Synopse der Handschriftlichen Urfassung von 1810 und Erstdruck von 1812*, hrsg. von Heinz Rölleke, Cologny-Geneve 1975, S. 339-398.
- (4) “Anmerkungen”, in: *Märchen aus dem Nachlaß der Brüder Grimm*, hrsg. von Heinz Rölleke, Bonn 1983 (3. Aufl.), S. 95-109.

Ranke, Kurt: *Enzyklopädie des Märchens*. Berlin/New York 1977ff.

Scherf, Walter: *Das Märchenlexikon*, 2Bde., München 1995.

Thompson, Stith: *The Folktale*, University of California Press, 1977. (S. トンプソン=荒木博之他訳『民間説話 上下』社会思想社、昭和52年)

関敬吾『日本昔話大成 全12巻』角川書店、昭和54年。(関『大成』と略す)

(1996. 10. 7 受理)

注

- 1) バジール『ペンタメローネ』(杉山洋子・三宅忠明訳)大修館書店、1995年、360~371ページ。
- 2) 13世紀に成立したと推定されるドイツ中世の英雄叙事詩。アイルランド王ハーゲンの娘ヒルデと孫娘グードルーンの物語。花嫁略奪のモチーフが含まれている。文献学者としてグリム兄弟はいちはやくこの作品が『ニーベルンゲンの歌』に並ぶ価値のあることを認めていた。
- 3) レレケはレクラム3巻本(参考テキスト5)において、1857年最終版までに削除された話を補足として28編(Anhang1~28)を取り上げ、解説をつけている。この研究ノートにおいても本編の考察の後、順次取り上げる予定である。
- 4) イタリアの作家(1330?—1400?)。商人として各地を旅して聞いた話や民間の言い伝えを集め『ノベレ(短編小説集)』としてまとめた。
- 5) Vgl. Heinz Rölleke, Die “stockhessischen” Märchen der “Alten Marie”: Das Ende eines Mythos um die frühesten KHM-Aufzeichnungen der Brüder Grimm, in: H. Rölleke, “Wo das Wünschen noch geholfen hat”, Bonn 1985, S. 39-54. 拙稿「グリム・メルヒェンのある<神話>の終焉をめぐる」(『長野大学紀要』第16巻第3号、1994年、69-76ページ)。
- 6) 拙稿「“Gattung Grimm”(グリム・ジャンル) — 『グリム童話集』のメルヒェン・ジャンルについて」(『長野大学紀要』第9巻第4号、1988年、17-26ページ)において、ドイツにおけるメルヒェン・ジャンルの歴史的な流れを考察。